

京都部落問題 研究資料センター通信

第45号

発行日 2016年10月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

当資料センター主催の「二〇一六年度差別の歴史を考える連続講座」の第四回目を京都府部落解放センターで、一〇月七日に開催しました。

講演要旨は次の通りです。尚、詳しくは年度末に発行予定の講演録をご参照ください。

第4回

洛北岩倉と精神医療

講師 中村治さん

(大阪府立大学人間社会学部教授)

京都洛北の岩倉には、平安時代以後三条天皇の皇女が岩倉の大雲寺の井戸水を飲んで精神病が治ったという伝承があり、古くから患者が集まるようになっていた。地元の史料からは、一八世紀中ごろには精神を患った人を預かっていたことがわかる。大雲寺の前のお茶屋に滞在し、観音さんにお参りし、奥の井戸水を飲み、井戸の横の滝に打たれるというのが治療の全てだった。一七八〇年の『都名所図会』には大雲寺の前に小屋が並んでいて「こもりや」と書かれている。また一七七三年には「岩倉の狂女恋せよ子規」という句を与謝蕪村が詠んでいる。この頃は、まだほかの患者が集まる地域と同じように患者には身内の者が付き添っていたが、一八世紀末頃から「強力」と呼ばれる専門の看護人

が患者を預かり看護するようになる。こういう体制が評判になりお茶屋では受入の患者を増やしていった。当時の岩倉の主要産物は、米、麦、柴で、交通の便が悪いため京都に運ぶのも大変だった。そのため患者が来て滞在すれば、米・麦・薪を消費してくれる、看護人、飯炊きなどの仕事も生まれるということ、患者は岩倉にとつて大切な客となつていった。また、患者が稲刈りなどの田仕事、洗濯、水汲みなどの家事を手伝うこともあった。

明治八年、京都府は日本最初の公立精神病院である「京都癲狂院」を南禅寺に設立し、岩倉の患者を収容して、日本でも患者に治療を施しているということ、を国の内外に示そうとした。しかし、明治五年、財政難と府の方針転換により「京都癲狂院」は閉鎖され、再び岩倉に患者が集まり始めたが、府は明治一七年、行政指導を行い岩倉に「私立岩倉癲狂院」を設立させた。明治二五年に私立岩倉精神病院と改称した後、明治三八年には私立岩倉病院と改称し、大正末期から昭和初期にかけて入院患者数は急激に増えた。しかし、岩倉の保養所(旅館や農家)から精神病患者は消えることなくむしろ増加していった。それは、精神病院ができて精神病患者の増加に追いつかないという状況があった。

また当時、ベルギーのヘルドでの精神病患者を家庭に預ける家族的看護が目ざされ、病院収容ほど費用がかからず社会復帰の準備をさせることができるということ、岩倉は有名になつていった。昭和一〇年には岩倉の保養所では約三二〇名の患者が預けられていた。

しかしその後、第二次世界大戦による食糧難によって保養所はほぼ消滅し、岩倉病院も陸軍によって接収され閉鎖された。戦後、法律の施行により保養所は消滅して私立の精神病院となるが、地元との摩擦が起こるようになる。急激な「開放医療」への反発や、ボイラーの設置、安価な米などの購入によって地元の産物を使用しなくなったことの原因があった。その後、病院側は開放医療をめぐる地元との話し合いをもって信頼関係を築こうとし、また、地元の側も急速な高齢化に伴って認知症の家族を預けるようになる。病院も介護を必要とする人を受け入れる施設、認知症の人を受け入れる施設を増やすようになり、患者・地域住民・病院それぞれが得るものがある関係になつていったのである。

岩倉で生まれ育った講師の中村さんは、地元の方々の信頼を背景に調査研究を続けて来られ、講座当日も多数の文書や写真資料を使いながら丁寧に説明された。

本の紹介

部落解放・人権研究所 衡平社史料研究会編
金仲燮・水野直樹監修

『朝鮮衡平運動史料集』

高野 昭雄
(大阪大谷大学教授)

一、はじめに

部落解放運動の原点となった「全国水平社」は一九二二年に結成されたが、その翌年、日本が植民地支配した朝鮮半島で、被差別民「白丁(ペクチョン)」の差別撤廃を目指し、社会運動団体「衡平社(ヒョンピョンサ)」が設立された。

この両者の交流を示す資料が、二〇一六年五月、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の世界記憶遺産アジア太平洋地域版に登録された。アジア太平洋地域版に日本から登録されたのは初めてのことである。登録された資料は、①第三回国水平社大会協議会提出議案、②米田富手帳、③米田富名刺、④「衡平社趣意書」、⑤猪原久重名刺、の五点であり、いずれも水平社と衡平社の交流を示す資料、あるいは交流に携わった人物に関する資料である。

奈良県御所市にある水平社博物館のホームページ(二〇一六年八月三日閲覧)には、今回の登録にあつたの記載がある。

「水平社と衡平社 国境を越えた被差別民衆連帯の記録」

水平社は一九二二年に日本で、衡平社は水平社創立に影響を受け一九二三年に当時、日本による植民地下の朝鮮で、それぞれの被差別民を中心に創立された。両社は一九二四年から提携を開始し、お互いの大会で人的交流を図り、祝辞・祝電を送り合つた。日本の被差別民・部落民と朝鮮の被差別民・白丁(ペクチョン)に対する厳しい差別の中示された登録推薦資料は、人類の普遍的原理である人権、自由、平等、博愛、民主主義を基調とした記録で、アジア太平洋地域ユネスコ記憶遺産に相応しい記

録である。

本稿で紹介させていただく『朝鮮衡平運動史料集』は、植民地期の朝鮮半島における衡平運動に関する史料を収録したもので、収録史料は一八〇点余にのぼる。今後の研究に広く活用されることが期待される。

二、池川英勝氏の業績について

衡平運動と水平運動との間には、いくつかの似通った点と異なった点がある。差別撤廃の理念や目標には多くの共通点が見いだせる。逆に、衡平運動の中心が、白丁出身者だけでなく非白丁出身者によつても担われた点などは、水平運動と異なる点である(金仲燮「衡平社と水平社の比較―創立期の類似性と差異」、和歌山人権研究所『紀要』第四号、二〇一三年)。

韓国と日本で、さらに大きく異なる点は、戦後の状況である。日本では戦後、部落解放運動が活発に行われ、戦前期の水平運動史に関しても多くの研究成果が蓄積されてきた。しかし韓国では、冷戦の熱戦化(朝鮮戦争)を経て、独裁政権下、衡平運動などの社会運動に関する研究をすることは困難な状況があつた。また朝鮮戦争によつ

て、白丁の住む集落も多く破壊され、戦時中、及び、戦後現在に至るまでの激しい人口移動も相俟つて、白丁は見えない、見えにくい存在となつていったのである。これらの状況から、衡平運動に関しては、当事者による記録や史料が、水平運動に比べると極めて少なく、研究には大きな史料的制約があつた。

そのため一九七〇年代までは、衡平運動に対する実証的研究は、韓国以上に日本で本格的にはじめられていたということが出来る。当時、研究のための史料としては新聞記事の役割が大きく、『東亜日報』の記事を翻訳・整理した池川英勝訳・秋定嘉和解説「東亜日報―一九二三―二八年―にみられる朝鮮衡平運動記事(一)・(二)・(三)」(『朝鮮学報』第六〇・六一・六四号、一九七一年・一九七二年・一九七二年)が史料集として大きな役割を果たした。また池川氏は、『東亜日報』、『朝鮮日報』、『京城日報』、『毎日申報』などの新聞記事やその他の史料からの「朝鮮衡平運動史年表」(『部落解放研究』第三号、一九七四年)を作成し、これら池川氏の研究成果が、長年の間、衡平運動研究の基礎データとなつてきた。

池川氏は、「朝鮮衡平社運動について」（『朝鮮学報』第八号、一九七七年）、「朝鮮衡平運動の史的展開―後期運動を通じて」（『朝鮮学報』第八八号、一九七八年）、「朝鮮衡平運動の展開過程とその歴史的性格」（『アジアの差別問題』明石書店、一九八六年）、「大同社・衡平社について―一九三五年から四〇年まで」（『朝鮮学報』第一七六・一七七号、二〇〇〇年）など一連の論考を発表され、これらの研究成果は、衡平運動を研究する上で、現在に至るまで基本的でオーソドックスな文献となっている。今回の本史料集の刊行まで、基礎史料としての官憲史料が極めて限られていた中で、衡平運動について多くの事実を明らかにしてきた池川氏の業績は貴重であった。

池川氏は、長年にわたって収集した新聞記事やその他の史料を元に、史料集の刊行を企図されていたが、二〇〇二年に急逝されたため、これら池川氏が残された史料ととりわけ新聞史料の整理とさらなる収集が、今後の課題として残されたままとなっている（『大阪人権博物館紀要』第七号、二〇〇三年、所収の文根洙「衡平社運動史研究について」、同「衡平社関係リスト」、秋定嘉和「池川英勝氏の衡平運動史研究に

ついて」を参照）。
三、『朝鮮衡平運動史料集』の意義

池川氏の業績以降も、衡平運動の研究は、主に新聞史料に依拠してすすめられてきており、官憲史料・行政史料は極めて限られていた。これは私が取り組んできた在日朝鮮人史研究とは大きく異なる点である。在日朝鮮人史研究であれば、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』（第一巻〜第五巻、三二書房、一九七五〜一九七六年）など官憲史料、行政史料を収集した史料集が、最も基本的な史料集として多くの研究に活用されてきた。その上で、新聞史料の収集や在日朝鮮人自身が残した史料の収集がすめられてきたのである。

在日朝鮮人史研究においては、戦前よりも戦後の研究が遅れている現状がある。それは、戦後、韓国・朝鮮人が外国人となり、かれらを調査した官憲史料、行政史料が急減することが大きな理由である。近現代の歴史研究においてはそれだけ官憲史料、行政史料は基礎史料として重要なのである。衡平運動研究においては、当事者の証言は極めて限られており、官憲史料も知られてこなかった。

それだけに今回、衡平運動に関する当時の官憲史料を発掘し収集した『朝鮮衡平運動史料集』が刊行されたことの意義は大きいのである。まず何と云っても、事項、人物、日時、大会での発言内容など、事実関係を確認、再検討するため基本的な史料としての役割が大きい。さらに、本史料集の刊行により、官憲史料と新聞史料との比較を通じて、様々な面から、互いの史料の妥当性や背景を検討する作業が可能になった。先行研究の再検討も行われることになるだろう。さらに、従来の史料状況では難しいと思われた新たな研究テーマを設定することも可能になったと思われる。

『朝鮮衡平運動史料集』に収録された史料の多くは、京城地方法院検事局（地方裁判所に併置された検察機関）が管下の警察署（鐘路警察署）から受け取った報告文書のうち、衡平社に関わる文書である。警察当局は、会合・集会に臨席し、配布文書を入手するとともに、演説などの内容を記録した。臨席にあたって、警察官が二名の場合は、日本人と朝鮮人の警察官の組み合わせで臨席することが慣行となっていたという。また団体事務所などの監視や郵送物の検閲、さらに

は活動家の尾行などを行うことにより、活動状況を詳細に把握していた（水野直樹氏による本史料集の解題、および水野直樹「日韓共同研究の成果／朝鮮衡平運動の史料集を刊行」『毎日新聞』二〇一六年七月四日夕刊）。

そのため、本史料集により、今までよくわかっていなかった衡平運動についての新しい事実がいろいろと明らかになった。衡平社が創立記念日の前後に毎年開催していた定期大会の様子を、詳細に知ることができるようになった。本史料集には、各大会の議題と討論の内容、大会で決まった人事や綱領・規約、出席者・発言者の姓名とその出身地、寄せられた祝辞・祝電とその個人・団体名が記載されている。大会後に記念式（祝賀式）が開かれ、余興が催されていたことも記されている。毎年大会と大会の間に開催されていた中央執行委員会や常務執行委員会の記録なども、多数収録されている（渡辺俊雄「輝きをます衡平運動の歴史―『朝鮮衡平運動史料集』発刊とその意義―『部落解放』第七二五号、二〇一六年）。

本史料集ではじめて内容が明らかとなった史料の中から、ここでは、朝鮮衡平社第六回大会に参加した徳永参二（愛媛県水平社）の祝

辞を紹介したい(二三八頁)。

(前略) 日本ノ穢多トカ朝鮮ノ白丁トカノ名称ハ或ル者ガ其名ヲ附ケテ呉レタノデアリマス 吾々モ人間デアリマス 侮辱スルモノガアレバ水平社員四百万、衡平社員三十万人ハ皆団結シ何処迄モ之ニ對抗スル積リデス吾ガ
天皇陛下ハ一視同仁ト仰セラレタノデアリマス 夫レニ拘ラス 吾等ガコンナニ差別ヲ受ケルノハ 其間ニ或者等ノ策術ノ為メデアリマス 水平社員ト衡平社員トガ 互ニ握手シテ共ニ日本帝國ノ国勢ヲ四海ニ發揮スル様ニ努力サレムコトヲ御願ヒシマス云々

引用文中、最後の部分が問題となり、物議を醸したことが本史料集に記されている。この発言と背景についても、今後様々な角度からの検討が不可避となろう。
その他、醜泉事件など数多くの反衡平運動についても、本史料集の詳細な記事は、新聞記事とはまた違った迫力で、その凄まじさを伝えている。警察当局の衡平運動への様々な認識が感じられるのももちろんのことである。

『朝鮮衡平運動史料集』は日韓の研究者が共同で取り組んだ成果であるという点も見逃せない。日本語史料、朝鮮語史料ともに、現在の文字つづりとは異なる書き方がされており、日本語であっても手書きのガリ版刷りで読みにくい部分も多くあったという。また、人名・地名の同定も煩雑であり、写真撮影された画像では読みとれない部分を確認するために、何度か韓国の所蔵機関を訪れて原文書

を閲覧しなければならなかったこともあったとのことである。日本語・朝鮮語それぞれ当時の微妙な表現は、意味をとることが困難で、日韓研究者の共同作業でなければ、本史料集は刊行できなかったのである(水野直樹、前掲「日韓共同研究の成果／朝鮮衡平運動の史料集を刊行」)。

本史料集の読みやすさ、使いやすさについてもふれたい。冒頭に収録された金仲燮「衡平運動の歴史の新しい理解のために」は、衡平運動の全体像と研究史を理解しやすくまとめている。また水野直樹「収録史料 解題」も、史料の来歴をわかりやすく叙述している。事項索引や人名索引、関係地図も使いやすく、これらは私のような初学者にとっては大変ありがたかった。本史料集のように、多くの人

にとって利用しやすい編集は、研究の裾野を広げるのに大きく役立つと思われる。様々な角度からの研究に幅広く役立つ基礎史料になろう。

四、今後の課題

本史料集の編集をおこなった部落解放・人権研究所 衡平社史料研究会は、さらに第二期研究会へと引き継がれるようである。韓国の国史編纂委員会等でのさらなる官憲史料の収集、池川氏が残された史料の整理、『東亜日報』、『朝鮮日報』、『京城日報』、『毎日申報』、『大阪毎日新聞朝鮮版』、『大阪朝日新聞朝鮮版』など当時の新聞史料、その他の雑誌史料など、さらなる史料の収集と整理が期待される。

今回の史料集編纂のきっかけともなった徐知侖「植民地期朝鮮における衡平運動の研究―日本の水野直樹の観点から」(二〇一〇年度 桃山学院大学大学院文学研究科博士学位論文)の巻末には、『東亜日報』、『朝鮮日報』をはじめとする新聞記事一覧がまとめられているが、こういった成果を、本史料集や池川(一九七二・一九七三)のように実際に記事を読めるような形にしたい。

本史料集の刊行は、これまでや交流が少なかったと思われる、部落史研究者と朝鮮史研究者が共同で取り組んだことによる成果である。そのことが、日韓共同研究へとつながることとなった。衡平運動に関する研究は、過去一〇年、韓国内の研究、韓国人留学生による研究に比して、日本人による研究は低調であった。塚崎昌之「水平社・衡平社との交流を進めた在阪朝鮮人―アナ系の人々の活動を中心に」(『水平社博物館研究紀要』第九号、二〇〇七年)は斬新な視点で書かれた読み応えのある論考だが、他には見るべき成果はほとんどなかったのではないか。史料集は活用されてこそ意味を持つ。本史料集の発刊を機に、衡平社創立百周年に向けて、日韓問わず実証的な研究が深まることに期待したい。最後に、衡平運動にも水平運動にも門外漢である私自身の力量不足により、拙い紹介になってしまったことを重々お詫びするとともに、本史料集刊行に向け大変な努力で尽力された関係各位に敬意を表したい。

(解放出版社発行、二〇一六年四月、二〇〇〇円)

本の紹介

矢野亮著

『しかし、誰が、どのように、分配してきたのか』

同和政策・地域有力者・都市大阪』

白波瀬 達也

(関西学院大学社会学部准教授)

本書の概要

著者の矢野亮は福祉社会学・社会福祉学を専攻する研究者で、現在は日本福祉大学の教員をしている。本書は著者の博士論文を加筆修正したもので、「大阪における都市型部落に暮らす人びとが、どのような生存保障システムの中で、いかに生存維持してきたのか」という問いを明らかにしようとするものだ。

この問いを解明する方法として、著者は自治体行政と社会政策が本格化する大正期から一九七〇年代にかけての、住吉(大阪市住吉区)で進められてきた「部落の人びとのまとめあげ」の変遷を主に文献資料に基づき分析している。

序章 本書で述べていくこと

- 第1章 生存保障システムの変遷
- 第2章 ローカルな生存保障
- 第3章 乳児死亡率の低減
- 第4章 再分配システムの転換
- 第5章 再分配をめぐる闘争
- 第6章 再分配システムの果てに
- 終章 支援を必要とする人へのために

序章では、先行研究が整理された上で、本書の三つの大きな目的が記される。第一は「分配の問題」の把握である。すなわち、国や行政が「厄介で難しい部落」に対して、いかに資源分配したのかを明らかにすることである。第二は「アソシエーションの問題」の把握である。これは、資源を分配する媒介者が誰だったのかを明らかにすることである。第三は「戦後日本社会における同和政策の『穢多頭II弾左衛門の仕組み』」の把握である。つまり、地域ボスが人

びとをまとめ上げるシステムの形成・継承・変容を明らかにすることである。

第1章「生存保障システムの変遷」では、明治維新や戦争などの大きな構造変動をふまえながら、前近代から近代にかけての、人びとの生存を可能にした資源分配の仕組み(生存保障システム)を概観している。

本章では、国家が軍拡による海外侵略を推進するなか、国内の民衆の生活が窮乏化し、スラム問題が深刻化したことに焦点が当てられる。著者は一九一〇年の大逆事件と一九一八年の米騒動が、部落対策・スラム対策の強化につながったと指摘している。また、一九二〇年以降、大阪市では社会部が設置され、融和事業が展開する過程で市民館と隣保館が増加したこと、そして方面委員による貧困家庭への訪問調査活動によって、生活困窮者の実態が明らかになったことに注目する。

著者は本章で部落の資源分配の担い手を「国家主導のアソシエーション」(融和団体など)と「民衆主導のアソシエーション」(水平社・労働組合など)に分類している。そして当時の住吉においては前者の影響力が相対的に強かったと指摘している。国家主導のアソシエー

ションは国家総動員体制へと向かうなか、生活困窮者を戦争に動員する仕掛けとしても駆動したと分析している。

部落は戦後、復興から取り残された地域として再び顕在化し、五年体制のもと、同和政策が進められるようになった。これによって、部落では地域ボスによるまとめあげによる資源分配システムが力をもつようになるが、著者はそれが戦前の融和団体等にルーツを持つことを明らかにしている。

大阪市の場合は戦後、「同和事業促進協議会」を設置して資源分配する方式を採用した(同和協方式)。著者は同和事業促進協議会に基づく事業が多くの成果を生む一方で、その主導権をめぐって争いが生じるなど、新たな社会問題の要因にもなったと分析している。

第2章「ローカルな生存保障」では、大正期から昭和初期までを中心に、社会政策の全国的な動向と、それにもなう大阪府・大阪市の部落施策の変遷が以下の四点にまとめられている。(1)部落改善から地方改善への政策転換期において、それに呼応する施策として大阪では、独自の方面委員制度を創設し、地域形成を図った。(2)地方改善から融和政策への転換を背景とし、各自治体に設置

されてきた地方改善部は、全国組織「中央融和事業協会」へと改組された。(3) 地方において有効に機能した隣保事業を都市部の大阪に適応・定着させるために融和事業という資源が投入された(これにともない大阪市社会部は組織再編を繰り返した)。(4) 国家総動員体制によって大阪市の行政が再編され、町内会・部落会が民生に関わる組織として法制化された。

また本章では、一九六四年に刊行された報告書『都市部落の人口と家族―大阪市住吉地区における戸籍の研究』の分析を通じて、住吉の人口動態が一貫してアンバランスであったことが明らかにされる。多産多死に起因する乳児死亡率の高さ、生産年齢人口の不足、高齢人口の増加など、当時の住吉が抱えていた課題は部落の人びとの自治組織だけでは解決が不可能であり、常に外部の資源や人びとに頼らざるをえなかった。著者は、このような生活実態を背景に、住吉において融和団体が組織され、地方改善事業・行政施策が展開されていったと述べている。

から一九一九年にかけてはピークに達し、三五・〇%にも及んでいた。その後、徐々に乳児死亡率が低減するようになるのだが、著者はその要因として(1) 融和団体(住吉仏教青年会など)の活動と地区整理事業(生活インフラの整備)の影響、(2) 大阪特有の貸付制度の影響、(3) 戦時動員体制における国家主導の貸付救済策の影響を挙げている。

さらに本章では、住吉における乳児死亡率の急激な低減が、戦時動員体制に向かうプロセスにおいて進行していることに焦点が当てられる。すなわち、「融和ボス」のまとめあげと融資事業が、結果的に人びとを戦争に動員する誘因ともなったことが明らかにされている。

第4章「再分配システムの転換」では、戦後社会が舞台となる。本章では一九六〇年代前半の住吉で、町会と部落解放同盟とのあいだに生じた、社会資源の管理と分配方式をめぐる主導権争いに焦点が定められる。

戦前から続いていた町会による社会資源の分配方式(大阪市↓町会↓同和会↓住民)は、部落解放同盟住吉支部の主導的人物らによって始められた日掛積立貯金と大阪市同和事業促進協議会(市同促協)の

財政的支援などの別の分配方式(大阪市↓市同促協↓解放同盟↓住民)の出現により、変更を余儀なくされた。この資金の流れの変化が係争点となり、町会と部落解放同盟の対立が激化。大阪市の調停に入るほどの出来事に発展した。

大阪市の住吉連合町会と部落解放同盟住吉支部の摩擦の調停者として、大阪市の議員の天野要を抜擢することになるのだが、著者は「一介の市議が調停者に選ばれたのはなぜか」という問いを設定し、それを以下の二点から説明している。ひとつは、天野要の父の時代から住吉部落に関わった経歴があったこと。もうひとつは、天野要が住吉連合会長の経験者であったことである。天野は住吉部落と町会の双方において政治活動のキャリアを有しており、両者の摩擦を円満に収拾できる人物として期待が寄せられたのである。さらに著者は、大阪市の天野要を調停者として抜擢した別の理由として、地域資源を町会に一元化することで、行政が管理しやすい体制に再整備しようとしていたのではないかと推察している。

しかし、こうした思惑は一九六九年の同和対策事業特別措置法(同対法)の制定・施行によって頓挫することになる。同対法という

国レベルの制度が新たに設けられることによって、「大阪市↓町会↓同和会↓住民」という社会資源の分配回路は、「大阪市↓市同促協↓解放同盟↓住民」に変容した。その結果、住吉部落に対する市同促協の財政的支援が同対法のもとで一層強化される一方、町会は衰退の一途をたどった。

以上のとおり、本章では一九六〇年代に生じた住吉連合町会と部落解放同盟住吉支部という二つの再分配のアクターによる主導権争いの歴史が整理され、それが自治体の施策や国の施策に強く影響されてきたことが具体的に述べられている。

第5章「再分配をめぐる闘争」では、部落解放同盟住吉支部が、地域有力者であった天野要を糾弾した「天野事件」(一九六九年)の内実が大阪市立大学所蔵の一次資料の丹念な分析から明らかにされる。

天野事件は、一九六九年一月の民生委員推薦地区準備委員会の席上で、準備委員が「部落差別」と認知される発言をしたことを発端とする。その際、委員長であり市議員でもある天野要が黙って聞きすごしたことの責任が追求されることとなった。部落解放同盟は周到に準備されたシナリオに基づ

き、これを「事件化」し、合理的かつ効率的に施策と運動とを結び付けた。

この出来事を通じて天野要は民生委員と町会長の役職を退くことになった。結果、生活保護申請と同和事業の窓口が隣保館に設置されるようになり、同和事業促進協議会と部落解放同盟住吉支部による新たな資源配分の基準がつけられた。このことによって住吉の生活保護受給率が急激に伸びた。一九七〇年代に入ると、生活保護制度のなかに「同和加算」や「同和勤労者控除」などの実現を要求するなど、資源動員をめぐる闘争が展開された。著者はこの事件と闘争を契機に、住吉がそれまでの地域において支配的だった自民党と訣別していったことを明らかにしている。

第6章「再分配システムの果てに」では、住吉における資源分配の主導権を持った部落解放同盟住吉支部が、一九七〇年代に進めたまちづくりが詳述される。建築学者の高橋恒は同和対策事業特別措置法に基づき、まちづくりのマスタープラン「住吉計画」を構想した。この計画においては、「地域的範囲で諸資源を活用し連帯的な人間関係を築くべきである」という行動規範が提示されている。こ

うした設計思想は、反都市的な共同体を目指すものであったが、人びとの生存を保障し続ける成果を得るまでには至らなかったと著者は分析している。なぜならば、それは「ほんとうに支援を必要とする人」のための社会政策ではなく、地域を経済的に活性化させるための資源投下による「まちづくり」だったからである。それゆえ、著者は「ほんとうに支援を必要とする人」に資源がゆき届きにくく、「スラム(化)↓地域対策↓再スラム(化)↓地域対策」という悪循環が生み出されてきたと述べている。

終章では、それまでの章の内容が要約され、改めて本書の主題である資源分配システムの変容・継承の問題に焦点が当てられる。そして戦後部落解放運動の後退の要因が「人びとの生存保障システムの体制化の歴史」に無自覚であった点に見出される。そして一九八〇年代以降は、解放教育を強化していくものの、部落解放運動が衰退するなかで、再び町会や民生委員といった旧システム、あるいは新たな「首長」や宗教システムによるまとめあげがおこなわれるようになったと指摘される。こうして人びとの生存をめぐるローカル・ポリティクスは、戦前から絶えず

展開してきたことが総括されている。

本書の評価

評者は大阪市西成区あいりん地区(釜ヶ崎)を中心に貧困問題を研究してきた社会学者であり、被差別部落の専門家ではない。そのため、いささかの外れなコメントとなるかもしれないが、その点についてあらかじめご了承願いたい。

さて、本書の最大の貢献は、「被差別部落に暮らす人びとを誰がどのようにまとめあげてきたのか」という問いを特定地域の通史から明らかにしていることである。

一九六九年の同和対策事業特別措置法の施行にともなう、同和地区指定された被差別部落に対して、公費に基づく資源が大量に投じられた。その際、部落解放同盟をはじめとするアソシエーションが、被差別部落に暮らす人びとの生存に多大な影響を及ぼしていったことは、比較的良好に知られている事実だ。著者はこの事実をさらに深く掘り下げ、近代以降の被差別部落対策として、そこに暮らす人びとをまとめあげるアソシエーションがいかなる働きをしてきたのかに注目する。そのなかで何度も強調されたキーフレーズが、「地域ボスが人びとをまとめ上げるシス

テムの継承・変奏」だ。すなわち、著者は地域ボスが被差別部落に暮らす人びとに資源分配するメカニズムが形や担い手を変えつつも、長い歴史を通じて続いてきたことを明らかにしたのである。

「地域ボスが人びとをまとめ上げるシステム」は継承され、変奏されるため、それを通史的に把握することは容易ではないが、本書は住吉という特定の地域を対象に選ぶことで、見事に実証した。なお、著者が見出した論点は、被差別部落におけるアソシエーションだけでなく、マイノリティをまとめあげる中間集団全般にも適用可能なものである。したがって本書の学術的貢献は部落研究のみならずマイノリティ研究一般まで及ぶものといえるだろう。

本書のもう一つの貢献は被差別部落の生存保障システムの変遷を社会福祉史のなかに適切に位置付けて論じていることである。日本の社会福祉学の分野において、被差別部落の研究は極めて少ない。実際に被差別部落は貧困をはじめとする複合的課題を抱えているケースが多いにもかかわらず、である。本書は主に住吉という特定の被差別部落の歴史を取り上げたものだが、生存保障システムの変遷を取り上げることで、どのような福祉

政策が展開されたのか、そしてそれらが住民の生活状況にいかなる影響を及ぼしたのか理解することができると、さらに、本書から一般的な福祉行政と同和行政(同和対策)の複雑な関係も紐解くこともできる。以上の点から、本書は社会学のなかでも社会事業史と地域福祉の研究領域において非常に重要な業績となりうるものだと考えられる。

一方、本書には幾つかの課題も見出された。著者は終章において、本書の課題として以下の三点を挙げている。(1)一九四〇年代から一九五〇年代の記述が薄いため、ローカルな人びと(住吉に暮らす人びと)が戦争の影響をどのように受けてきたのか述べることができていない。(2)農民運動史、社会民主主義史、郷党社会制度史などをカバーしていないため、融和運動の系譜が十分に論じられていない。(3)一九八〇年代から現在にいたる「部落民アイデンティティ」の促進・教化の過程が捉えられていない。

落の生存システムを明らかにしようとするものだが、住吉の事例の位置づけが十分にできていない。被差別部落としての住吉がどれくらいの規模を持つのか、各々のアソシエーションの組織率がいかにほどこであったのか、本書を読んでも十分にわからなかった。また、他の被差別部落との比較が乏しいため、事例研究を通じて得られた知見の一般化ができていない点が惜しまれる。

二つ目は、被差別部落に生きる人びとの暮らしが見えにくい点を指摘したい。本書は住吉で展開したアソシエーションについて徹底的に調べ上げ、その成立・継承・変容を見事に整理している。しかし、アソシエーションに関わる人びとの姿については、あまり立体的に浮かび上がってこなかった。確かに四章と五章で詳述される天野事件を契機にして市同促協と部落解放同盟住吉支部が資源分配のヘゲモニーをつかむようになったことがわかった。そしてこの新たな体制によって、住吉の生活保護受給者が急増し、一連の運動の結果、同和加算や同和勤労者控除などを勝ち取り、一九七〇年代の前半には、壮大なまちづくり計画に基づく改良住宅を獲得したこともわかった。しかし、住吉に暮らす

人々の就業状況や就学状況にどのような変化が生じたのか、本書から把握することはできなかった。

同対法を契機にして、被差別部落に暮らす人々に対する奨学金給付や就労保障が進んだことは広く知られている。しかし、本書からは、こうした取り組みが住吉においてどのような影響を及ぼしたのか捉えることができなかった。また、部落解放同盟をはじめとするアソシエーションが、非常に大きな分配力を獲得するなかで権力などのように集中させていったのか十分にわからなかった。

被差別部落に生きる人びとをまじめに上げてきた地域ボスの変遷に注目する著者の視点は非常に優れたものだ。こうした視点の強みをさらに活かすためには、「誰が地域ボスなのか」だけでなく、「誰が地域ボスに包摂されたのか」「誰が地域ボスから排除されたのか」を明らかにする必要があるのではないか。ではないだろうか。

以上、二つの点から本書の課題を指摘したが、これらは本書の価値を貶めるものではない。特に二つ目の課題については、本書で提示された視点を今後さらに発展させるための論点であり、著者を含む多くの研究者によって追究されるべきものだと考えている。

ここまで主に学術的な観点から本書を評してきたが、実践面においても学ぶべき点が多くあることを最後に付け加えたい。周知のとおり、同対法は二〇〇二年に終結し、同法に基づく事業の受け皿となってきたアソシエーションの多くは、資源分配の力を弱めている。その中で都市の被差別部落の中で顕在化しているのが、経済的安定層の流出、経済的不安定層の滞留・流入、高齢化などである。同対法の終結は、再び被差別部落の貧困問題を深刻化させており、改良住宅の一般開放に伴う混住化は誰を部落民と規定するのかをますます困難にさせている。

こうした課題を目の前にして、被差別部落で活動するアソシエーションが、いかに人びとをまとめあげることができるのか、そして「ほんとうに支援を必要とする人」を包摂しうるのかを問い直していく必要がある、今日ますます高まっているといえるだろう。その意味で本書は歴史研究ではあるが、現代社会に向けたアクチュアルな問いを提起してもいるのだ。

(洛北出版発行、二〇一六年三月、一、一五〇〇円)

文化・光と陰 人権の視点から』／ユ・シミン著 萩原恵美訳『ボクの韓国現代史 1959-2014』／あいむひあ大阪『わたしは、ここにいる 福島南相馬市寺内第一仮設集会場3.11の証言』

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 2 第1部 部落共同体の基本的職業と歴史 第1章 部落共同体形成直前の皮田 川元祥一

皮革の比較史 1 革づくり人のアイデンティティ 1 西村祐子

部落解放 731 (解放出版社刊, 2016. 10) : 600円

特集 死刑から考える

不戦和栄の思想を多くの人に 西光万吉邸修復完成・永住地保存の経過と今後のとりくみ 飯田敬文

被差別部落の通史に向き合って 『入門被差別部落の歴史』刊行記念講演会から

部落史研究の現水準をふまえて 寺木伸明／私にとっての通史 黒川みどり

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 3 第1部 部落共同体の基本的職業と歴史 第2章 戦国大名と皮田 川元祥一

皮革の比較史 2 革づくり人のアイデンティティ 2 西村祐子

部落史研究 創刊号 (全国部落史研究会刊, 2016. 3) :

1,000円

特集 第21回全国部落史研究大会

前近代史分科会 「近世九州中北部の被差別民」報告 福岡藩における三つの被差別身分について 石瀧豊美／

一江戸時代の長崎一犯科帳が織りなす被差別民の世界 阿南重幸

近現代史分科会 「高度経済成長期における部落問題一 同和对策審議会答申成立をめぐる諸問題」

内閣「同和对策審議会」と全日本同和对策協議会一「全日本同和会」結成前後の活動とその影響一 割石忠典／1950年代の被差別部落をめぐる状況と政策形成一奈良県を事例に一 井岡康時

福岡藩の皮革大坂廻送に伴う葉村屋吉兵衛の役割再考 上田武司

書評 近現代部落史研究の新展開への模索と可能性一黒川みどり『創られた「人種」一部落差別と人種主義一』をめぐって一 朝治武

歴史科学協議会および『歴史評論』編集委員会にたいする本会からの申し入れについて 全国部落史研究会運営委員会

全国部落史研究大会及び記念事業一覧

部落問題研究 217 (部落問題研究所刊, 2016. 6) : 2,083円

第53回部落問題研究者全国集会報告

全体会

戦争体験をいかに継承するか一「戦後70年」の地平に立って一 吉田裕／わたしと戦争体験一 人見佐知子／「原爆孤児」の体験を聞き取って一 体験を継承することの意味一 平井美津子

歴史1分科会 近世身分研究の新展開

18世紀末における皮革流通構造の変容と皮商人一津山藩を事例に一 高垣亜矢／京都の非人一「坂」から「悲田院」へ一 吉田ゆり子

歴史2分科会 戦時・戦後の地域における政治構造と社会運動

高度成長前半期における地域社会運動と教育一京都府丹後地域のちりめん闘争と「丹後の教育」一 富山仁貴／

翼賛選挙期大都市近郊都市における地域政治構造の変容一東京府八王子市を事例に一 中村元

現状分析・理論分科会 同和行政終結と地域の人権課題を考える

部落問題解決の障害を克服する課題と兵庫県・丹有地域での同和行政終結の課題 村上保／地域における介護・福祉のとりくみ 中島純男／原爆被害者相談員の会のあゆみと被爆者の人権 三村正弘

教育分科会 道徳の「特別教科」化の検討

道徳教育の教科化と対抗戦略 碓井敏正／道徳の「特別教科」化を考える一その問題点と教育実践者の立ち位置一 折出健二

思想・文化分科会 戦争の実相を再認識する

ニューギニア戦線を描いた話題作から 秦重雄／映画人と沖縄 島田耕

本願寺史料研究所報 51号 (本願寺史料研究所刊, 2016. 7)

書評『増補改訂本願寺史第二巻』 小林准士

「頁の余白に」 「近世の本願寺、その日その日」 編集子

水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 29 (信州農村開発史研究所刊, 2016. 3)

惟善学校設立の経緯一新史料の紹介を兼ねて一 斎藤洋一 史料紹介

「松本一件」関係史料(補遺3) 松本人権推進古文書研究会／桑山村名主市之丞の日記 文政八年(一八二五) 九月～十二月 佐藤敬子

密教学 52 (種智院大学密教学会刊, 2016. 3)

近世真宗差別問題史料(番外編の二の上)一取縮懸「天保十四癸卯年五月従公儀被仰渡之義ニ付御寺法御取縮被仰出諸事伺帳」一 左右田昌幸

民衆史研究 91 (民衆史研究会刊, 2016. 7)

書評 杉本弘幸著『近代日本の都市社会政策とマイノリティー一歴史都市の社会史一』 藤田貴士

リベラシオン 163 (福岡県人権研究所刊, 2016. 8) : 1,000円

特集 九州の近代化産業遺産と炭坑労働

田川の近代化産業遺産と部落問題 安蘇龍生／九州の近代化産業遺産一それが問いかけるもの一 有馬学／廢墟か、世界遺産か～世界遺産登録「明治日本の産業革命遺産」から学ぶ目 藤原恵洋／森崎和江から石牟礼道子へ一「スラを引く女たち」が拓いた世界一 井上洋子／ふるさと軍艦島への思い 坂本道徳／三池炭鉱関連の近代化産業遺産 中野浩志／資料紹介 三池炭鉱の囚人労働 大原俊秀／官営製鉄所の八幡立地と石炭産業 清水憲一／グローバル時代・ローカルな知の普遍性～被差別部落の語り部記録と山本作兵衛日記解説をつなぐもの～ 森山沾一

図書紹介 小正路淑泰編著『堺利彦 初期社会主義の思想圏』 平原守

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 26 中津藩村上玄水の解剖 石瀧豊美

反共社会を生き抜くための体験記述—濟州4・3事件にかかわる公的文書を読み解く 高誠晩

在日朝鮮人が「4・3」を語るということ—濟州島にルーツを持つ在日朝鮮人二世知識人を中心として— 鄭栄鎮
韓国における戸主制度撤廃の背景をさぐる—現地調査の記録 (2015年3月9日~12日) — 野口道彦

振興会通信 129 (同和教育振興会刊, 2016.7)

同朋運動史の窓 35 左右田昌幸

月刊スティグマ 241 (千葉県人権センター刊, 2016.8) : 500円

講演録 「差別戒名」から考える部落差別発生史 鎌田行平

世界人権問題研究センター研究紀要 21号 (世界人権問題研究センター刊, 2016.6) : 2,500円

ソーシャルワークと貸付制度に関する予備的考察 矢野亮

京都市立養正小学校「朝鮮学級」の成立過程—1950年代前半における公教育改編の試みとして— 松下佳弘

初期エイズにおける女性の身体と人権—複合的リスクと不可視化をめぐる—考察— 堀江有里

人権教育からみた「性の商品化」—ジェンダー平等教育の展開のなかで— 古久保さくら

アイヌ民族教育と先住民族教育 友永雄吾

全国隣保館連絡協議会情報誌 71 (全国隣保館連絡協議会刊, 2016.8) : 500円

地域の歴史 識字学級〜字を覚えて夕焼けが美しい〜 高知県香南市赤岡市民館

地域と人権 1162号 (全国地域人権運動総連合刊, 2016.7) : 148円

書架 大塚茂樹著『原爆にも部落差別にも負けなかった人びと 広島・小さな町の戦後史』 小西正則

月刊地域と人権 388 (全国地域人権運動総連合刊, 2016.8)

特集 全国地域人権運動総連合 第7回定期大会

であい 652 (全国人権教育研究協議会刊, 2016.7) : 160円

人権文化を拓く 224 私たちは、先人たちに「正義を還す義務」がある 中村一成

であい 653 (全国人権教育研究協議会刊, 2016.8) : 160円

人権文化を拓く 225 伝わらなかつた部落問題 角岡伸彦

であい 654 (全国人権教育研究協議会刊, 2016.9) : 160円

人権のまちをゆく 73 フィールドワーク 釜ヶ崎のまちスタディーツアー

人権文化を拓く 226 「人権概念」を考える 安富歩

ノートル・クリティーク 9 (ノートル・クリティーク編集委員会刊, 2016.5) : 1,000円

戦後日本型社会保障システムの果てに—1970年代の大阪住吉における「まちづくり」を事例として— 矢野亮

ヒューマンJournal 217号 (自由同和会中央本部刊, 2016.6) : 500円

部落解放運動40年を振り返って 20 映画「橋のない川」糾弾の反省 灘本昌久

ヒューマンライツ 340 (部落解放・人権研究所刊, 2016.7) : 500円

特集 相談の役割

調査結果からみる部落問題のいま 5 「特別措置法」終了後の部落問題に関する差別事件の動向—『全国のあいつぐ差別事件』から考える (後編) 本多和明

各地の人権研究所の取り組み 11 豊かな人権文化の創造と地域社会の発展を 一般財団法人奈良人権部落解放研究所 大平和幸

国際学術大会「衡平運動を再び考える」4 国際学術大会第2部—午後の部 (その2) 矢野治世美

書評 黒川みどり著『創られた「人種」—部落差別と人種主義』 内田龍史

ヒューマンライツ 341 (部落解放・人権研究所刊, 2016.8) : 500円

特集 現代社会の平和とは

調査結果からみる部落問題のいま 6 三重県伊賀市「同和問題解決に向けた生活実態調査」からみえるもの 松村元樹

国際学術大会「衡平運動を再び考える」5 巨済島・釜山の近現代史を学ぶ 矢野治世美

書評 寺木伸明/黒川みどり共著『入門 被差別部落の歴史』 部落史から「社会を問う」 矢野治世美

ヒューマンライツ 342 (部落解放・人権研究所刊, 2016.9) : 500円

特集 第41回部落解放・人権西日本夏期講座

調査結果からみる部落問題のいま 7 「明日の湖南のために」思いめぐらせたこと 山根範恵

各地の人権研究所の取り組み 12 「人咲く 愛咲く 社会咲く」をめざして 一般社団法人和歌山人権研究所 辻健二

ひょうご部落解放 159 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2015.12) : 700円

部落解放研究第36回兵庫県集會報告書

部落解放 728 (解放出版社刊, 2016.7) : 1,000円

第42回部落解放文学賞

部落解放 729 (解放出版社刊, 2016.8) : 600円

特集 部落問題と向きあう若者たち 6

本の紹介 黒川みどり著『創られた「人種」—部落差別と人種主義』 友常勉

水平社博物館所蔵衡平社関係資料 ユネスコアジア太平洋地域世界記憶遺産に登録される 守安敏司

ヘイトスピーチ解消法成立までの経緯とサイレントマジョリティへの警戒 金尚均

ハンセン病「特別法廷」問題とは何だったのか 歴史の変わり目に被差別者の解放を押し戻そうとする権力者たち 福岡安則

部落差別の実態が争われ審理されていく 鳥取ループ・示現舎に対する裁判闘争 中井雅人

沖縄戦71年 慶良間諸島「集団自決」と向き合う体験者 栗原佳子

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 序章 百姓の共存と分離・分断 川元祥一

部落解放 730 (解放出版社刊, 2016.9) : 600円

特集 主権者教育と人権教育

本の紹介 上杉聰著『日本会議とは何か 「憲法改正」に突き進むカルト集団』/横田弘著『増補新装版 障害者殺しの思想』/長泥記録誌編集委員会編『もどれない故郷 ながどろ 飯館村帰還困難区域の記憶』/山路興造著『都の

解放新聞奈良県版 1048 (解放新聞社奈良支局刊, 2016.8.25) : 50円

アジア太平洋地域ユネスコ記憶遺産登録「水平社と水平社 国境を越えた被差別民衆連帯の記録」紹介 4 「水平社趣意書」(大島水平社機関誌『火箭』第1号, 全国統一社, 1929年1月)

解放新聞奈良県版 1049 (解放新聞社奈良支局刊, 2016.9.10) : 50円

アジア太平洋地域ユネスコ記憶遺産登録「水平社と水平社 国境を越えた被差別民衆連帯の記録」紹介 5 猪原久重名刺

解放新聞広島県版 2211 (解放新聞社広島支局刊, 2016.6.25)

法蔵館が自戒を込めて「断り書き」 講義内容に「旃陀羅」=部落差別 香月院深励の著作集発刊

解放新聞広島県版 2212 (解放新聞社広島支局刊, 2016.7.5)

第68回県連大会 一般活動方針(案)

解放新聞広島県版 2215 (解放新聞社広島支局刊, 2016.8.5)

浄土真宗本願寺派に問う 小森龍邦

語る・かたる・トーク 257 (横浜国際人権センター刊, 2016.7) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 54 道徳教育と人権教育 3—道徳と人権学習の根本的違い— 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「ラスト道徳」 吉成タダシ

語る・かたる・トーク 258 (横浜国際人権センター刊, 2016.8) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 55 道徳教育と人権教育 4—修身と酷似する「私たちの道徳」— 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「進路公開」 吉成タダシ

語る・かたる・トーク 259 (横浜国際人権センター刊, 2016.9) : 550円

シリーズ「解放教育」継承への扉 56 道徳教育と人権教育 5—同和教育の先駆者の方々の思い— 外川正明

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「ごまかすことをやめた」 吉成タダシ

かわとはきもの 176 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2016.6)

靴の歴史散歩 121 稲川實

かわとはきものNo.172についての謝罪文

皮革関連統計資料

グローブ 86 (世界人権問題研究センター刊, 2016.7)

追悼 上田正昭名誉理事長

『今村家文書史料集』を読む 井岡康時

コリアNGOセンターNews Letter 43 (コリアNGOセンター刊, 2016.7)

特集 ヘイト・スピーチ解消法成立

まちづくりの新たな段階を迎えたウトロ地区 消えゆく

風景と残すべき歴史・コミュニティ

社会事業史研究 49 (社会事業史学会刊, 2016.3) : 3,000円

戦後都市社会政策と女性失対労働者—1940-50年代の京都市失業対策事業を事例として— 杉本弘幸

信州農村開発史研究所報 136号 (信州農村開発史研究所刊, 2016.6)

内山総助は「公議所議員」か 瀧澤英夫

本の紹介 『古文書に学ぶ松本領内被差別部落の歴史・史料集』の紹介

人権と部落問題 888 (部落問題研究所刊, 2016.8) : 600円

特集 戦争を伝える

「部落差別の解消の推進に関する法律案」制定に反対する決議 部落問題研究所

文芸の散歩道 小川正『奴隷船』—戦時下の、大江卓の伝記小説— 秦重雄

部落問題研究所70年の面影 5 集い来たりし人々(研究員) 東上高志

人権と部落問題 889 (部落問題研究所刊, 2016.9) : 600円

特集 災害と人権

紹介 部落問題研究所編『身分的周縁と部落問題の地域史的研究』 町田哲

文芸の散歩道 藤村における透谷像 川端俊英

部落問題研究所70年の面影 6 朝日賞の受賞 東上高志

人権と部落問題 890 (部落問題研究所刊, 2016.9) : 1,100円

特集 地域からみた部落問題の解決過程

部落解放運動の原像 東上高志/京都市伏見区竹田・深草地区 同和事業で地区は解体された—町づくりは住民の参加と合意でこそ— 中川正照

「部落差別解消推進法案」を批判する 奥山峰夫

2015年度部落問題研究所定期誌総目次

2015年度部落問題研究所刊行・文献目録

人権と部落問題 891 (部落問題研究所刊, 2016.10) : 600円

特集 保育と人権

文芸の散歩道 諸井條次の戯曲「野火」—秩父山地に現れた後光さす毛沢東 秦重雄

部落問題研究所70年の面影 7 朝日賞が見落としたもの 東上高志

じんけんぶんかまちづくり 52 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2016.7)

「部落地名公開事件」のその後 佐々木寛治

2016連続講座「橋のない川」と部落問題とその運動を考える[報告]

書評 角岡伸彦著『ふしぎな部落問題』 重本洋輔

季刊人権問題 384 (兵庫人権問題研究所刊, 2016.7) : 700円

緊急特集 国・行政が部落問題を残す

自民党の人権戦略と「『部落差別』固定化法案」 新井直樹/「部落差別の解消の推進に関する法律案」を必ず廃案に 水田全一

人権問題研究 36 (大阪市立大学人権問題研究会刊, 2016.3) : 1,500円

変容する都市の同和地区とその「都市下層」への編入について—一部問題を階級・階層の視点からとらえなおすための一試論— 島和博

1950年代大阪におけるバラック・クリアランスとその帰結 吉村智博

収集逐次刊行物目次 (2016年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

愛生 802 (長島愛生園長壽会刊, 2016. 8)

小鹿島 (韓国) を訪れて 尾崎元昭

あすばる 34 (甲賀・湖南人権センター刊, 2016. 2)

滋賀の福祉の礎を築いた3人の夢・熱・光

ウィングスきょうと 135 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2016. 8)

図書情報室新刊案内

『アクティブラーニングで学ぶジェンダー』(青野篤子著) / 『首長たちの挑戦—女性が政治を変える』(女政のえん編)

大原社会問題研究所雑誌 694 (法政大学大原社会問題研究所刊, 2016. 8)

書評と紹介 杉本弘幸著『近代日本の都市社会政策とマイノリティー歴史都市の社会史—』中嶋久人

岡山部落解放研究所報 294 (岡山部落解放研究所刊, 2016. 8) : 100円

中世犬神人について 稲谷祐慈

龍安寺「石庭」の作庭者をめぐって 楠木裕樹

解放運動推進フォーラム 8 (真宗大谷派解放運動推進本部刊, 2016. 6)

部落差別問題等に関する教学委員会が開催される 阪本仁

解放新聞 2769 (解放新聞社刊, 2016. 7. 4) : 90円

紹介 野間宏・沖浦和光著『アジアの聖と賤』河出文庫

解放新聞 2770 (解放新聞社刊, 2016. 7. 11) : 90円

ぶらくを読む 103 ケガレの根源「人間の死」を淵底まで降りて考える 湧水野亮輔

解放新聞 2771 (解放新聞社刊, 2016. 7. 18) : 90円

「全国部落調査」復刻版出版事件の経緯と裁判闘争の意義 「全国部落調査」復刻版出版糾弾闘争本部
ノンフィクションからの警鐘 20 金谷武洋著『日本語は亡びない』音谷健郎

解放新聞 2774 (解放新聞社刊, 2016. 8. 8) : 90円

ノンフィクションからの警鐘 21 鎌田慧著『ドキュメント 水平をもとめて』音谷健郎

解放新聞 2776 (解放新聞社刊, 2016. 8. 29) : 90円

本の紹介 沖浦和光著『部落史の先駆者 高橋貞樹—青春

の光芒—』朝治武

解放新聞 2778 (解放新聞社刊, 2016. 9. 12) : 90円
ぶらくを読む 104 日本会議がめざす社会はどういう中身か 湧水野亮輔

解放新聞 2779 (解放新聞社刊, 2016. 9. 19) : 90円
ノンフィクションからの警鐘 22 今野晴貴著『ブラックバイト 学生が危ない』音谷健郎

今週の1冊 鳥居著『キリンの子 鳥居歌集』

解放新聞 2780 (解放新聞社刊, 2016. 9. 26) : 90円

今週の1冊 柄谷行人著『憲法の無意識』

解放新聞 2781 (解放新聞社刊, 2016. 10. 3) : 90円

松本治一郎の生涯 世界水平・人間解放先駆者の荊の道
1 鵬政治

解放新聞京都版 1061 (解放新聞社京都支局刊, 2016. 9. 1)

「相模原事件」から見えてくるもの JCIL代表矢吹文敏さんと語り合う

解放新聞京都版 1062 (解放新聞社京都支局刊, 2016. 9. 10)

本の紹介 内藤正典著『となりのイスラム』

解放新聞奈良県版 1044 (解放新聞社奈良支局刊, 2016. 6. 25) : 50円

アジア太平洋地域ユネスコ記憶遺産登録「水平社と衡平社 国境を越えた被差別民衆連帯の記録」紹介 1 第3回全国水平社大会協議会提出議案(1924年3月)

解放新聞奈良県版 1045 (解放新聞社奈良支局刊, 2016. 7. 10) : 50円

アジア太平洋地域ユネスコ記憶遺産登録「水平社と衡平社 国境を越えた被差別民衆連帯の記録」紹介 2 米田富手帳(1924年)

解放新聞奈良県版 1046 (解放新聞社奈良支局刊, 2016. 7. 25) : 50円

アジア太平洋地域ユネスコ記憶遺産登録「水平社と衡平社 国境を越えた被差別民衆連帯の記録」紹介 3 米田富名刺(水平社同人 京都市上京区鷹野北町 全国水平社連盟本部)

事務局よりお知らせ

◇6月から始まりました「2016年度差別の歴史を考える連続講座」も5回が無事に終了しました。最終の第6回は、11月11日(金)です。講師は、塚崎昌之さん(佛教大学・大阪大谷大学非常勤講師)、タイトルは「1928年、昭和天皇の京都での即位の「大典」と朝鮮人—朝鮮人土木労働者の利用と排除を中心として—」です。是非、ふるってご参加ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryō.suishinkyōkai.jp/>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分